敦盛の最期

熊谷は捕らえた若武者を助けようとするが、周囲を味方の軍勢が取り囲む中、若武者を逃がすことができない。

熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしともおぼえず、
どこに刀を突き立てたらよいかもわからず、
目もくれ心も消えはてて、前後不覚におぼえけれども、
目もくらみ気も遠くなって、前後もわからないように思われたけれども、
さてしもあるべきことならねば、泣く泣く首をぞかいてんげる。
そのままでいるわけにはいかないので、
「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりけるものはなし。
ああ、弓矢を取る（武士の）身ほど残念であるものはない。
武芸の家に生まれずは、①何とてかかる憂き目をば見るべき。
生まれなければ、
情けなうも討ちたてまつるものかな。」とかきくどき、
非情にもお討ち申したものだ。とくどくど繰り返し嘆き、
袖を顔に押し当ててさめざめとぞ泣きゐたる。
やや久しうあつて、さてもあるべきならねば、※鎧直垂を取つて
やや長い時間がたって、そのままにしているわけにもいかないので、
首を包まんとしけるに、錦の袋に入れたる笛をぞ腰に差されたる。
包もうとしたところ、錦の袋に入れた笛を腰に差しておられる。
「あな②いとほし、この暁、城の内にて管絃したまひつるは、
なんと　今日の明け方、（平家の）城の中で音楽をなさっていたのは、
この人々にておはしけり。当時味方に東国の勢何万騎かあるらめども、
この人たちでいらしたのだ。今、味方に東国の軍勢が何万騎かいるだろうけれども、
いくさの陣へ笛持つ人はよもあらじ。上臈はなほも優しかりけり。」
笛を持ち込む人は決していまい。高貴な方はやはり風雅なものだ。
とて、※九郎御曹司の見参に入れたりければ、③これを見る人、
と思って、（源氏の）御曹司・九郎義経にお見せ申したところ、
涙を流さずといふことなし。
後に聞けば、※修理大夫経盛の子息に※大夫敦盛とて、生年十七にぞ
後に聞くところでは、（この方は）修理大夫経盛の子息で大夫敦盛といって、年、十七に
なられける。それよりしてこそ熊谷が④発心の思ひは進みけれ。
おなりであった。このことがあってから、熊谷の発心の思いはより強くなった。

※鎧直垂…鎧の下に着る衣服。　九郎…義経は父・義朝の九男で、通称を九郎といった。
修理大夫…宮中の修理・造営の職の長官。　大夫…ここでは位が五位の者のこと。

平忠盛
- 清盛
  - 重盛
  - 宗盛
- 経盛
  - 敦盛

重要語句

いとほし	かわいそうだ・ふびんだ
おはす	（……て）いらっしゃる
なほ	やはり

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 例に従って、次の言葉に含まれる係りの助詞を□で囲み、変化している結びの部分に――線を引きなさい。

(例) さぬきの造と[なむ]いひ<u>ける</u>

さ め ざ め と ぞ 泣 き ゐ た る

(2) ――線①「何とてかかる憂き目をば見るべき」とあるが、これはどういう意味か。適当なものを選びなさい。

ア それでもこのようなつらい目にあうことがあるだろう

イ どうにかしてこのようなつらい目にあうべきだろう

ウ 決してこのようなつらい目にあうことはないだろう

〔　　〕

(3) ――線②「いとほし」の意味を選びなさい。

ア かわいらしい、愛らしい

イ ふびんだ、かわいそうだ

ウ たいへんめずらしい

〔　　〕

(4) ――線③「これを見る人、涙を流さずといふことなし」とあるが、これはどういう意味か。適当なものを選びなさい。

ア これを見た人は、みな涙を流した

イ これを見ても涙を見せず、何もいわなかった

ウ これを見る人の中には、涙を流さない人もいた

〔　　〕

(5) ――線④「発心の思ひ」とはどのようなものか。適当なものを選びなさい。

ア 改めて悲しみが深まり、嘆く思い。

イ 手柄を立て、立身出世しようとする思い。

ウ 出家し、仏門に入ろうとする思い。

〔　　〕